

## 日本的靈性美

村田昇

## 第一論 歌道と宇宙自然

和歌は日本詩情の原始である。美とは調和ある充実した生命と力の対象である。和歌と名づける抒情詩の美は律動を主とする。音律生命は深秘である。声に発して歌うて諧調なくば美ではない。宇宙自然は美の根元である。宇宙自然は律動している。宇宙自然に包摂されている人間も亦律動体である。和歌は宇宙自然の律動生命と諧調しているから美しいのである。詩は靈魂の窓・天啓の声・生命の躍動といはれる所以である。この原理を解明したのは、日本仏教である。日本仏教は歌道哲学となつて、和歌の發達の原理となりつつ遠く脉流して現代に達している。ここには自然と仏教の結合史から究明を始めみたい。

声塵得道音楽によつて閉された心が自ら開かれ、異つた各人区々の心が、溶け合い統合されて、普遍的社會精神に化することは、記・紀の岩戸神話に語られている。岩戸神話は農耕日本民族の稲作の豊穰を祈る為に神を慰樂し奉る歌舞であつたが、神樂・田遊び・田樂等と変態しつつ、田園芸能性を離さず日本歌舞史の主流として今日

迄流伝し、日本人の宗教心を培育した。今昔物語卷廿八第廿七話に賤しい傀儡子くぐつから国衙の役人目代めしろに出世して素性を隠していたが、傀儡子どもが多く国衙にきて、もの吹き詠う拍子かなを聞き、それに魅了されて俄かに立ち走りて、賤しい素性を露出したとある。

梁塵秘抄三五九に、

あそびをせんとやうまれけむ、たはふれせんとやむまれけん、あそぶこどものこゑきは、わがみさへ、こそゆるがるれ、

とあるのも、人心を諧和する音楽の絶対的自然力を証している。貴賤・男女・老若・都鄙等諸の差別を撤去して平等一如に解かすことにおいて音楽に及くものはない。法華經に觀世音菩薩普門品・妙音菩薩品がある。維摩經に仏国品がある。これらは日本人に声塵の宇宙的功德を深信せしめた。和歌は抒情の音楽である。宇宙自然の律動に和した日本人の抒情が和歌である。大和魂である。華嚴經に説示した無辺広大な美しき魂である。みやびものものあはれも風流も皆ここから縁起している。この日本歌論の哲学的源泉は、弘法大師の「文鏡秘府論」「三教指帰」「文筆眼心抄」であり、その又根底には、「異本即身義」「声学実相義」等の真言哲学があるのであ

る。ここに和歌の美の様式が日本の自然の四季の流転から学びえられてゐる。

春を以て陽中となし徳沢偏ならず。即ち平声の象なり。夏は草木茂盛にして炎熾なること火の如し。即ち上声の象なり。秋は霜凝て木落ち根を去り本を離る。即ち去声の象なり。冬は天地閉藏して万物盡き収る。即ち入声の象なり。(文鏡秘府論・原漢文) 詩は題目中の意を銷し盡くすことを貴ぶべし。然も見て當に見る所の景物と意響者と相兼たるを道ふべし。若し一向に意を言へば、詩の中妙ならず及た味無し。景語若し多く昼と相兼て堅かならざれば、理を道ふと雖も亦味無し。昏旦の景色四時の氣象皆意を以て之を排して、次序有りしめ意を兼ねしめてこれを説くを妙となす。且日の出る初には河山林峰涯壁の間、宿霧及び氣靄皆目の色の照者の處に隨て使ち明けて、物に觸れて皆光色を發する者、霧氣の湿者する處に因つて、日に照らされて水光發す。日午に至つては氣靄盡くと雖も陽氣正に甚し。万物皆蒙蔽して却て用に堅えず。晝の間に至つては氣靄未だ起らず陽氣稍くに歇て万物澄淨なり。遙に此を目して乃ち用うるに堪えたり。一物に至るまで皆光色を成す。此の時乃ち用うるに堪えたり。説く所の景物を思ひて必ず好く四時に似たる者を従ひよ。春夏秋冬氣色時に隨つて意を生じて之を取り用ひよ。意に之を用ふる時は、必ずすべからく神を安んじ慮を淨くすべく、目にその物を睹て即ち心に入れよ。心にその物を通じ、物通じて即ち言ふ。この状を言ふこと、すべからくその景に似たるべし。語はすべからく天海の内皆方寸に入れ納むべく云々(同)

といふ。この心意(美意識・美観)を、四時の景観を借つて様式となす論である。外景が美意識を生み、美意識が詩を形成すると論じてゐる。内外相応である。かうした深い美学が既に九世觀の日本の天才において発見されてゐた。文中に述べてゐる霧靄の景は、モンスーンの影響をうける東洋的風土の特色である。次に十七勢・十四例・十體・六義・八階・六志・九意の漢詩の様式を、四季の景観を以て説いてゐるが、ここには和歌と直接関係がないから省略した。次に「異本即身義」には、

問、先づ六大とは何ぞ。答、地水火風空識、此を六大といふ。問何が故に此を六大といふ。答、この六を一切有情非情に遍くするが故に大という。問ていふ。いかでかこの六大有情非情に遍くするが故に即身成仏といふを得るぞ。問、この六大はこれ衆生の六大なり。いかでか仏の六大にあらざること無しといふか。答、心仏及び衆生是の三差別無し。故に仏の六大にあらざること無しといふ。

と。これによれば人間も自然も平等に成仏してゐる。汎神論である。「声字実相義」には、

五大皆響有り、十界言語を具す。六塵悉く文字、法身是實相。内外の風氣響に發すれば、必ず響くを名づけて声といふなり。響は必ず声に由る。声は即ち響の本なり。声發して虚しからず、物の名を表すと號して字といふなり。名は必ず体を招く。之を実相と名づく。声字実相三種区に別けたるを義と名づく。又四大相觸るれば音響必ず應ずるを声といふ。五音八音七例八転皆悉く声を待て起る。声の名を詮する必ず文字に由る。文字の起りは本これ

六塵なり。

法然隨緣有りとは、如上の頭形等の色或は法然の所成なり。謂く法仏の依正是なり。大日經に曰く、爾の時に大日世尊等三昧に入り給ふ。即時に諸仏の国土地平なること掌の如し。五宝間錯し、八功德水芬馥盈滿せり。無量の衆鳥あり、鸞鶴出<sub>二</sub>和雅の音<sub>一</sub>を、時華雜樹敷榮し間列せり。無量の樂器自然に韻に諧ひ、其の聲微妙にして人間かんことを榮う所なり。無量の菩薩の隨福所感の宮室殿堂意生の座あり。

と、宇宙を無限律動體と観じ、又人身も法身の変化と観じ、色声香味觸法の六塵悉く文字とした。文字とは律動する宇宙生命(法身)の人間の具現である。生活そのままが表現であるということである。自然を尊重する密教は、弘法大師の眞言宗に由り、「復た草木<sub>も</sub>感能く言語ふことあり。」(書紀一書)「葦原中国は盤根・木株・草葉<sub>も</sub>猶能く言語ふ」(同)。常陸風土記・同。「語問ひし盤根・木樹・草の垣葉をも、語止めて、天の盤座放れ。」(延喜式晦大跋)「語問ひし盤根樹立、草の片葉をも語止めて。」(遷都崇神)という原始日本人の言靈信仰を、生かしている。西行が

我が歌を読むは遙に尋常に異なり。華香郭公月雪都て萬物の興に向ひても、凡そ所有相是虚妄なること眼に遮り、耳に満てり。

又読み出す所の言句は皆是真言にあらずや。華を読むとも實に華と思ふことなく、月を詠すれども月と思はず。只此の如くして縁に隨ひて読み置く處なり。紅虹たなびけば虚空いろどれるに似たり。白日かがやけば、虚空明かなるに似たり。……この歌はれ如来の形體なり。されば一首を読み出でては一體の仏像を造る思ひ

日本文藝學原論 「日本の靈性美」

をなし、一句を思ひ続けては、祕密の眞言を唱ふるに同じ。我れ歌によりて法を得ることあり。若しこゝに至らずして、妄りに此の道を学ばざり、邪路に入るべし。(喜海撰・桐尾明恵上人伝記)とある論も眞言哲学をうけついでた歌論である。

眞言僧守覚法親王の「右記」の「管絃音曲等事」の項に、絃管在<sub>二</sub>左右<sub>一</sub>。君臣知<sub>二</sub>治乱<sub>一</sub>。移<sub>二</sub>風易<sub>一</sub>俗。莫<sub>レ</sub>善<sub>二</sub>於樂<sub>一</sub>。然則布<sub>レ</sub>政有<sub>二</sub>礼樂<sub>一</sub>之爾規。 (中畧) 自然之辞通<sub>二</sub>上下<sub>一</sub>。謂<sub>二</sub>之一音<sub>一</sub>。音有<sub>二</sub>寒之温<sub>一</sub>。

是陰陽二音者也。陰寒氣生<sub>レ</sub>音。是水音也。又陽温氣生<sub>レ</sub>音。是火音也。然後強氣生<sub>レ</sub>音。是金音也。和氣生<sub>レ</sub>音。從土音也。此五音為<sub>二</sub>宮商再徵羽<sub>一</sub>。從<sub>レ</sub>此生<sub>二</sub>八音<sub>一</sub>。從<sub>二</sub>八音<sub>一</sub>生<sub>二</sub>六十四音<sub>一</sub>。是則八卦。八音生<sub>二</sub>八々六十四音<sub>一</sub>也。日月之音者。以<sub>二</sub>晝夜風<sub>一</sub>為<sub>二</sub>其音<sub>一</sub>。衆星之音亦風也。(中畧) 順風起而正<sub>二</sub>理四序<sub>一</sub>之節<sub>二</sub>之時<sub>一</sub>。国祥相成。(中畧) 内典所記。以<sub>レ</sub>音成<sub>二</sub>仏事<sub>一</sub>云々。此文有<sub>二</sub>浅深<sub>一</sub>了見。浅義易<sub>レ</sub>知。深義者夫妙音薩塘<sub>二</sub>三摩耶形費拏<sub>一</sub>也。四絃也。此四絃有<sub>二</sub>発心修行菩提涅槃<sub>一</sub>四音<sub>一</sub>。又名<sub>二</sub>因行証入<sub>一</sub>音<sub>一</sub>。大師御釋。此費拏四絃四種法配之後。示<sub>二</sub>三件薩塘祕旨<sub>一</sub>。演<sub>二</sub>即身頃証之事<sub>一</sub>。總<sub>二</sub>伎樂薩塘<sub>一</sub>者。以<sub>二</sub>三音三昧<sub>一</sub>。引<sub>二</sub>入衆生之方便<sub>一</sub>也。深奥難<sub>レ</sub>頭。下畧。

と、弘法の所説を統いで聲塵得道を力説している。

註 守覚法親王は、後白河天皇の第二皇子。仁和寺門跡となり北院に住した。御室法流の中興の祖。建仁二年寂。著「左記」(新校群書類聚第十九卷所収)の序には、「凡今度滅亡平家一族之中。旧好不<sub>レ</sub>浅之輩少々侍」等とあって、平家物語考究の資料に

なる。平家物語卷三「赦文」に、「仁和寺の御定守覚法親王、急ぎ参内あつて、孔雀經の法を以て御加持あり。」とある。又、卷七「經正の都落」に「修理の大夫經盛の嫡子、皇后宮の亮經正は幼少の時より、仁和寺の御堂の御所に、童形にて候はれしかば云々」とある。

和歌は自然の響、法爾隨縁、自然智であつて、後得智を要しない。涅槃界よりの発声である。海潮音である。地涌菩薩の叫びである。故に「古今和歌集序」に、

やまと歌は、ひとの心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、ことわざしげきものなれば、心に思ふ事を見る物聞く物につけて、いひ出だせるなり。花に鳴く鶯、水に住むかはづの声を聞けば、いきとしいけるもの。いづれか歌を詠まざりける。力をも入れずして天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、をとこ女の中をもやはらげ、たけきもののふの心をも慰むるは歌なり。この歌、あめつちの關けはじまりける時よりいできにけり。

とある。ひとつ心とは仏教の一心。種とは天台の種熟脱の種、真言の種子曼荼羅。仏教では、万有の根本原理である真如又は如来藏心を一心といい、天台の摩訶止観第五上には、「夫一心十法界ヲ具ス。一法界又ハ十法界ヲ具ス。此三千、一念心ニ在リ、若心無クンバ而巳。今爾タル有心バ、即三千ヲ具ス」とあり、華嚴經如来林菩薩偈には、「心ハ工画師ノ如シ、種々ノ五陰ヲ画ク、一切世界ノ中、法トシテ造ラザル無シ」とあつて、何れも天台学でも重んぜられる法句である。真言でいう曼荼羅とは、万有一如なる無限宇宙の当体、即ち如

来藏心である。種子とは草木の種子に喩えた名で、梵の一字から無量の義を生ずるという信仰である。梵字中の阿字は、「阿字は是れ一切伝教の本なり。凡そ最初の口を聞く歌に皆阿の声あり。若し阿の声を離るれば即ち一切の言説なし。故に衆声の母とす。凡そ三界の語言は皆名に依る。故に悉曇の阿字は亦衆字の母なり。」(大日經疏第七)と重んじている。ひとつ心の種は、歌論でいう「實」、よろづの言の葉は「花」であるから、ここに花實相兼の古典様式が考えられている。この「實」は仏教から見ると、如来の眞實大慈大悲が藏されてゐる。これは宣長が「この心といふが則物のあはれをしる心也」(石上私淑言上)といったあはれをしる人間的愛情であつて、新古今集漢文序の「理世撫民之鴻基」や定家の有心と同質の心である。その心の表現であることは、空華である。真言である。平等性智である。原人は人間の作為した概念的言語文字は理解しえないけれども、ものの美やものの響きには平等に感動する。響きと交遍して自然と同化し、日本の靈性を自覚してきた。王朝時代が降るに従ひ信仰と文芸は弥々密着して、源氏物語に極った。源氏物語の仏教は主として法華經と恵心の往生要集である。要集の思想の基礎は、法華經と淨土思想の統一にあつた。淨土所依の「大無量壽經」には、極樂淨土の莊嚴を述べて、「清風時に発りて五つの音声を出す。微妙の介商、自然に相向せり。」「自然萬種の伎樂有り。又其の樂声、法音に非ざる無し。清揚哀亮にして微妙和雅なり。十方世界の音声の中に最も第一を為す。」「但自然快樂の音のみ有り。」「觀無量壽經」には、「行者当に水流・光明及び諸の宝樹・鳧雁・鸞鶴皆妙を説くを聞くべし。」とあり、「彼の国には常に種々の奇妙雜色の鳥有り

白鶴・孔雀・鸚鵡・舍利・迦陵頻伽・共命の鳥なり。是の諸衆の鳥晝夜六時に和雅の音を出す、其の音五根・五力・七菩提分・八聖道分是の如き等の法を演暢す。其の土の衆生、此の音を聞き己りて皆悉く仏を念じ法を念じ僧を念す。「彼の仏の国土には微風吹動し、諸の宝行樹及び宝羅網微妙の音を出す。譬へば百千種の樂を同時に俱に作すが如し。是の音を聞く者は皆自然に念仏・念法・念僧の心を生ずとある。

道元の正法眼藏に「山色溪声」の巻があつて、

大宋国に東坡居士蘇軾とありしは、あるとき廬山にいたりしぢなみに、溪水の夜流する声をきくに悟道す。偈をつくりて常総禪師に呈するにいはく、雞声飯是廣長舌。山色無非清淨心。夜來八萬四千偈。佗日如何舉似人。

とあり、「無情說法」の巻には、

いはんや空におふる樹木あり、雲におふる樹木あり、風火等のなかに所生長の百艸萬樹、おほよそ有情と學しつべきあり、無情と認ぜざるあり、艸木の人畜の如くなるあり、とあり、「龍吟」巻には、

我道龍體裏有師子吼。萌芽も枯木龍吟なり。もし枯木に非ればいまだ龍吟せず。宮商角徵羽は龍吟の前後二三子なり。

とある。又、道元の「学道用心集」には、

弘法の大道は、一塵の中に大千の経卷あり。一塵の中に無量の仏まします。一艸一木共に身心なり。仏道の身心は草木瓦礫なり。

風雨水火なり。

春夏秋冬の推移の間に、物一々が宇宙法の実相を物語り、無情說法

日本文藝學原論 「日本の靈性美」

の妙味を全現しているのである。これに帰命することが自然法爾であり、無為自然である。曇鸞の「浄土論注」に

「阿修羅の琴鼓者無しと雖も音曲自然也」とある。自然の音曲は宇宙生命の律動である。如来藏縁起の音曲である。この音曲を聞く者が音響認・南無觀世音菩薩である。その者の利益は、

善男子、若無量百千万億の衆生有りて、諸の苦悩を受けんに、是の觀世音菩薩を聞きて、一心に名を称せば、觀世音菩薩、即時に其の音声を觀じて、皆解脱することを得しめん。

と、「觀世音菩薩普門品」に説かれてある。世音とは遷流して常住ならぬ有為の世界の煩惱衆生の音声である。觀世音菩薩は、これ觀照し慈悲し給うてある。衆生が南無觀世音と称えるのは、觀世音の慈悲が称えしめているのである。「野守鏡」には、「般若経には一切諸法は声にをむく」とあり、ピタゴラスは、宇宙生命を律動する音響体と確認した。律動は宇宙の秩序である。それは悉皆衆生南無觀世音と称えているのである。「静かさや岩にしみいる蟬の聲」。心を澄した時にこれが聴取できる。仏教はこれを帰命という。帰命とは和である。涅槃である。称名・題目・声明・和讃・和歌・朗詠・今様・平曲・能楽等諸の文化の源流が、この帰命に発している。

人間は正に神仏から最高の啓示を受ける瞬間において、自己を象徴とした無に等しい罪惡・絶望・至恩な生命を諦観する。この故に偉大なる芸術の旋律は悲哀である。弘法大師の作と伝えられる「いろはうた」「ほろほろと鳴く山鳥の声聞けば父かと思ふ母かと思ふ」の行基大徳の歌、「ねんねんねんねーよ」に始る子守歌、真言

宗の御詠歌・南無阿弥陀仏・南無觀世音菩薩の称名等は、日本の抒情詩を一貫する悲哀を象徴している。宗教的実存としての悲哀を日本人に自覚せしめたものは仏教であつた。東洋における宗教的共通運命感情、東洋におけるハーモニーを導き出したのは、梵唄であつた。梵唄は日本においては、和讃・詠歌・講式・琵琶に伴奏される平曲・浄瑠璃にその悲哀が脉流する。悲哀は人界の有限に絶望した者が、高く普遍的なものを欣求する心情である。人間の思考の不確実さに絶望し、意識そのものに不信を抱く者の、全き幸福は無意識の牧歌的な状態にある。すべて無意識な美は、純粹な高き美である。源氏物語の中に一千有語を数えるあはれが浄化された世界である。源信の天台淨土教の厭欣思想に育てられた世界である。「野守鏡下」には、

諸経論にあかす所、声の徳にはしかず。然則釈迦善逝、微妙法の一をのべて、法をときつゝ衆生を教化し、法照禪師は、五会の典をととのへて、現身に無生忍をえしよりこのかた、月氏、日域おなじく音律声明の道をたしなまずといふ事なし。いはゆる法道和尚は、即身に極樂世界にゆきて、宝池の浪の音を引声の念仏につたへ、慈覺大師は、独行に如法法花を修して、懺悔のなじみのことを懺法の妙典にとどめ、また玄奘三蔵は、梵網戒品に流砂のおぼれ声を誦せしかば、出家の人はこれを學し、在家の人はかれをとびて、仏事をおこなふには、この道をぞさきとし侍りける。源氏ものがたり、こゑすぐれたるかぎりさぶらはせたまふ。念仏の曉がたなど、しのびがたしといへるも、(葵巻)ただ其声のよきにはあらず、声明にすぐれたる僧をえらばれたるよし。念

仏といへるは、阿弥陀經の典なるべし。またおなじき物がたりに法花三昧おこなふ堂の懺法のこゑ、山おろしにつきてきこくるとたふとく滝の音にひびきあひたりといへるも、(若葉巻)おほかたの景氣ばかりをいへるにあらず。懺法の典に山風のおろしぶし、滝のつたひぶしといふに口伝のあるを思ひよそへてかきたり。娑婆世界は、声塵得道の国なるがゆゑに、音律ただしければ、内外の法おのづから成ずるもの也。

とある。懺法とは法華懺法で、一定の作法の下に、伽陀・三宝礼・供養文・奉請段・敬礼段・五偈・十方念仏・後唄・三礼・錫杖の順に請せられるもので、音楽的旋律の悲哀美がある。この念仏は止観念仏でなく引声念仏である。野守鏡は更につづいて、  
祖師蓮界上人は、宣秋門院の御惱の時まゐりて法華懺法をよみけるに、懺法の声におどろきて、六根をなやましたてまつりつる鬼六人、なくなくまかりいづなど、女院の夢に御覽せられたりける。曉より御心ちさわさわとならせ給ひたりけるとなむ申しつたへて侍り。慈鎮和尚は、此上人を先達として、声明を興行せられき。或経に、仏法滅せむとする時は、声明菩薩まつかへるといへり。……朝夕音律の曲のみたしなまれば、法験もことあらたに門跡もまことにさかえたりける。

とある。「元亨釈書音芸志」には、

本朝音韻ヲ鼓吹スル者四家アリ。經師ト曰ヒ梵唄ト曰ヒ唱導ト曰ヒ念仏ト曰フ。声明ハ印土ノ名五明ノ一也。支那偏取シテ梵唄ト曰フ。良忍大原山ニ居シテヨリ盛ニ此業ヲ唱ヘ以テ法事ノ莊儀トス。忍声明ニ深ク一日唄策ヲ披イテ墨譜ヲ盡ク。忽チ策中ニ光明

ヲ出ス。大原ノ地梵唄ノ場ト成リ、方今天下声明ヲ言フ者皆忍ヲ  
祖トス。

とある。「抑々声明が普及して日本の一般芸能の上に顕著な影響を  
与えるに至ったのは、平安朝の始め嵯峨・仁明天皇の頃で、天台宗  
・真言宗が中心である。慈覚大師は天台声明、弘法大師は真言声明  
を伝えた。慈覚の高弟源信僧都は、各種芸能の天才であったが、平  
易な和文を以て多くの「和讃」を作り、大衆の間に仏教音楽の新路  
を開拓した。慈覚大師から九代目の天台声明中興の祖良忍上人は洛  
北大原に声明専門の道場采迎院を建てた。良忍の門弟家寛は後白河  
天皇に声明を伝えた。「梁塵秘抄」には、天皇の声明研究が多く入  
っている。

弘法大師が支那から伝来した声明も全国に希及したが、浄土宗・  
浄土真宗・日蓮宗に伝ったものは、主として天台声明である。<sup>①</sup>榮華  
物語「疑卷」に、「八月山の念仏は慈覚大師の始め給へるなり。中  
の秋の風涼しく、月円かなる程なり」とある。これは毎年八月十五  
日望の月夜に、叡山西塔の常行堂で引声念仏が行はれていたことを  
物語っている。慈鏡の「声決書」(一三九六)には、優婆梨尊者が  
釈尊入滅後、受くる処の梵唄を以て魚山に入り、この山を根據にし  
て盛にこれを称道した。魚山について「翻訳名義集」卷三に「尼民  
達羅此處には地持山という。その形海中の魚に似る故に」とある。  
魏の曹植は中国の魚山に遊び、足下溪谷を流れる水音を無心に聞き  
清雅澄徹にして余韻深く、自ら旋律をなし空中に響いて曲節高下あ  
り、その中に韻律を感得し、遂に梵唄の譜を制定するに至った。魚  
山の名は洛北大原の近くに伝ひ、「魚山集」の朱書に、「魚山の両

傍に呂の川律の川在り、案ずるに昔大原声明の元祖良忍の住処、こ  
れにより彼の声明に魚山呂律の名称を設く」(原漢文)とある。そ  
の呂律は声明道の肝心で、流水の音自ら呂律をなしたというのであ  
る。

① 田辺尚雄 日本の音楽 一五一頁

② 村田 昇 源氏物語世界の浄土教 第六篇 源信僧都 第七  
篇 源氏物語と往生要集

## 第二論 和歌と禪定—白楽天・幽玄

唐の白楽天は、詩禪一致の大詩人である。和歌と禪を論ずるに際  
し、白楽天を俟することはできない。白氏文集が日本に初めて渡来  
したのは、承和五年(八三八)で、楽天在世の時である。楽天詩が  
平俗にして、出家せざる方外の仏教的詩人である理由で、忽ちに心  
酔し、菅原是善は、「白楽天讃」に、「安禪の病を治め、菩提の心  
を発せり。」「集七十卷、盡くこれ黄金」と讃せしは、その一例に  
すぎず、天皇を初め高級の智識人こそって楽天に私淑した。その理  
由は楽天が平俗と仏教的詩人である以外に、金子彦次郎氏は、  
一 白詩の背景をなす社会生活と、我が平安時代のそれとが、極  
めて相酷似せること。

二 白楽天の地位身分と、我が平安時代文学者のそれとが、又頗  
る相酷似せしこと。

一 白楽天の性格・趣味・人となり等、又殆んど我が平安時代に  
於ける典型的日本人とも称すべき類型のそれなりしこと。

の三を追補している。<sup>①</sup>

樂天は当時隆盛の華嚴・天台・真言・禪・淨土等の諸宗派に心を傾けて修養したが、殊に国政を非議して江州の司馬に配流の後は、全く意を政界に絶ち、心機一転、一意空門に進み入り、年と共に益々上達して遂に其妙諦に悟入したのである。其晩年の作品の如きは、殆んど全く此の靈境から出たもの如くである。其六讚偈の如きは、最もよく彼の信仰の境地を証すると思はれる。其序に曰く、  
樂天常有願。願以今生世俗文筆之因。翻為來生讚仏乘轉法輪之緣也。今年登七十一。老矣病矣。與來世去甚遙。故作六偈。跪唱於仏法僧前。欲以起因免縁。為來世張本也。

といひ、其六偈に於て所謂仏、法・衆生・懺悔・發願の真諦を道破している。彼は謫居無聊の際、好んで老莊を読み、集中に老莊に関する吟詠が少くない。彼は儒教的立場からして、猛然よく兼濟の誠を致さんとして、志遂に成らず、失脚の悲運に陥りながら、而も知足安分、超然よく独善の実を得たるは、道仏二教より得た所が少くない。彼が大詩人と成りえた所以は、勿論天賦の才力であるが、「香山寺白氏洛中集記」の、

我有本願。「願以今生世俗文字之業。狂言綺語之過。轉為將來世世讚仏乘之因。轉法輪之緣」也。

という絶対的積極的文芸觀であった。これが日本人の詩文創作及び受賞の動脈となった。これによって仏教と文芸が結ばれた。かか

る作者のみが眞の天才であり、古典的価値がある。  
伝教大師の若年經營によって、叡岳に開敷した日本天台は、シナの

天台大師の創始した天台宗を伝えて、一層光彩を添えたものである。

天台大師の教義は、教相門と止観門に分かれ、教相門は仏教の理論的考究であり、止観門は教相門の考究せし結果を、客観的に認識して、死物とならしめず、之を吾人の一心に応用し来り、吾人をして仏陀と成らしめんとする実践修行の方面なり、故に教相と止観を智目行足と喩え、二者共に欠ぐべからざるものとしてゐる。この天台宗と、シナの真言宗と達磨伝来の禪宗を合せ、以て一大円教とせるものが、日本天台である。円教とは空假中の三諦の円融教である。真言宗は有門の假諦、禪の空門は空諦、有空の二門を兼ね、空假の二諦を双照するものは、円教の中諦である。止観とは、心を練つて一切の外境や乱想到動かさず。心を特定の對象にそそぐを止(Samatha)といひ、それによつて正しい智慧をおこし、對象を觀るのを觀(Vipassana)という。仏道を全うさせる不離の關係にある。止観には後天的な実践面における迷いを断つ徳、それを断つて生じた智の徳、本来的に智・新の二徳は、不二であるとす徳の相対的意味と、止観は言や思慮を超越したもので、絶対的意味があるとする處は、禪的である。止観には、觀不思議境・真正發菩提心・善行安心止観・破法徧・識通塞・道品調達・对治邪執・知位次・能安忍・無法愛の十乘の觀王がある。

良源に師事した恵心流の祖源信(九四三)は、源氏物語には横川僧都のモデルとされている。その著「一乗要決」は、天台の宗義を高揚した名著であり、「往生要集」は、天台の觀念々仏と善導の称名念仏を説いた淨土教の聖典で、後世淨土教の祖と仰がれた。源信は台密禪一致を以て觀門を立てた。即ち觀法を立するに、阿頼耶の八

識を所觀となし、元初の一念をなして元品の無明を破り、九識の位にある三十三諦の月を見教四、諸尊の曼荼羅を開き教密。本覺の天真猶宗禪を頓悟せんとする「觀心要集」「真如觀」「本覺讚釈」「空觀」は、実にその旨を明かに示す。弟子覚超は、觀法の用心は、第一に色を去って心を觀ぜよ。第二に心の中にて、六識を去て八識を觀ぜよ。第三に八識の中にて、界内の頼耶を去り、界外の頼耶を觀ぜよ。第四に界外の頼耶に就いて、諸心を去り、元初の一念を觀ぜよ。第五に元初の一念に就き、其相を去り、其性如真を觀ぜよと教えている。頼耶は藏識とよばれ、外界のあらゆる現象の種子によって構成され、世界の顯現を成立せしめるとともに、また逆に外的事象の種々なる影響を受けられるものである。儒者大内記慶滋保胤が起し、指導的地位に立った。勸学会は、保胤と同時に生きた「空也誄」の著者源為憲の「三宝繪詞」(下)「比叡山坂本勸学会」の條によれば、法の道文の道を立に相勸めならう詩道仏道一味の結社で、十四日の夕は俗は月に乘じて寺に行く道の程、声を揃えて、樂天の、

百千万劫菩提樹 八十三年功德林

願以今生世俗文字之業。 狂言綺語之誤。

願為立來世世讚仏乘之因 転法輪之縁。

此身何足し愛 万劫煩惱根

此身何足し厭 一聚虚空塵

等の詩句を誦した。「扶桑略記」には、天台僧二十名・翰林学生二

日本文藝學原論 「日本の靈性美」

十名合せて四十名が、西坂本で、毎年三月と九月の十五日に、一日「法華經」を講じ、その後で經中の一句を題して和歌を詠し詩を作った。保胤の主唱で、狂言綺語の罪を滅ぼさんが為に、文道先達の学徒をあつめてはじめたのである。

シナでも盧山白蓮社等、文人からなる念仏結社があつたが、保胤の頃日本文芸界に大影響を与えていた白樂天も亦、念仏結社を営んでいた。勸学会もその影響をうけ、又一方には天台浄土門の興隆に刺戟されている。保胤には「日本往生極樂記」「十六相讚」「池亭記」の著があり、寛和二年横川に上山して出家し、寂心と改めた。最も止觀に熱心であり、「池亭記」は樂天の「池上篇并序」を全面的に規模して制作したものであるなど、樂天の詩禪一味の生活は、彼の理想であつた。彼は源信の二十五昧結縁衆の有力な一人であるが、この三昧は、止觀の念仏からきている。

樂天も老莊を好む、失意の人であり、保胤等勸学会に集る文人貴族も、中流貴族で藤原氏專横の時代の日陰者であつた。遠く道真をはじめこれら文人が、樂天に私淑し、現世否定的な浄土教に帰依したのは当然であつた。

樂天の以狂言綺語之誤為讚仏乘之因という文芸觀は、日本天台宗で最も重要聖典である法華經安樂行品に、「諸の外道・梵志・尼羅子等、及び世俗の文筆・讚詠の外書を造る、及び路耶陀・逆路伽耶陀の者に親近せざれ」とある教に反して、保胤の在世社会は、源氏物語や法成寺の如き美的仏教が流行していた。この矛盾に処した思考が、天台の中道実相の助をかけた「狂言綺語の文芸觀」であつた。末長く日本人の文芸哲学となつた。それに協力したものは、

源信僧都の「往生要集」等であった。「往生要集」は善導の「往生礼讃」を受け、「往生礼讃」は世親の「淨土論」を受け伝えてゐる。三者を貫くものは、摩訶止観の観法で、源信は止観の観法に基く、理観念仏を最尊として、能はざる者は観想念仏を以てせよとする。又、「観心要集」「観心往生論」等を著し、阿弥陀の三字を以て空假中の三諦とし、念仏を以て一心三觀に同ずるものとした。

観想念仏は仏の美しい三十二相等を心に觀想する念仏で、淨土所依の三部經に説かれた極樂の如く寺院・佛像・絵画・音楽・庭園・薫香・静寂な美しき環境が欣求される。此土の極樂淨土である。絶対的美の顕現である。それを構想したのが道長の法成寺、二十五菩薩來迎圖・源氏物語であった。源氏物語が最貴の古典である所以である。しかしかくの如き仏教美を樂みうるものには、高官と多くの富を私有して不耕食して榮華に満足した一部の上層貴族で、眞実に現実を穢土として厭離し、彼岸の淨土を欣求するものは、その他の貴族並に庶民であった。保胤もその一人であった。彼の勸学会の道場創設の廻文には、「方今會之故旧、人数不<sub>レ</sub>幾、或是散位、或亦無官、何況當結之徒、貧而樂<sub>レ</sub>道之人而已」「莫<sub>レ</sub>辞、官無<sub>レ</sub>俸禄、莫<sub>レ</sub>道、家太貧婁」とあり、勸学会に集つた人々は、官も資産もなかった。「池亭記」は保胤の白樂天風な自適生活を記しているが、中には、「応和以來、世人好起<sub>二</sub>豊屋峻宇<sub>一</sub>」「近代人世之事、「無<sub>二</sub>可<sub>レ</sub>恋、人之為<sub>レ</sub>師者、先<sub>レ</sub>貴先<sub>レ</sub>富……人為<sub>レ</sub>友者、以<sub>レ</sub>勢<sub>レ</sub>以利」と、当時の貴族を批判し、「官爵者任<sub>二</sub>運命……寿夭者付<sub>二</sub>乾坤<sub>一</sub>」「不<sub>レ</sub>要<sub>二</sub>屈<sub>レ</sub>膝折<sub>レ</sub>腰而求<sub>二</sub>媚<sub>レ</sub>王侯將相<sub>一</sub>」と、自己の禪的な貧賤を誇り、貴族生活の虚栄を侮辱している。美的仏教の半面には、街頭に

乞食する空也聖の如き禪的行動的な庶民淨土教が起つた。

源信は散乱奮動する名利の塵勞を横川の静寂に避け保胤達と二三三五昧會を結衆している。

三昧とは止観の念仏からきている。「観心要集」に、「夫觀法者諸仏之祕要、衆教之肝心也。故天台宗。以為<sub>二</sub>規模<sub>一</sub>。心地觀經曰。能觀<sub>レ</sub>心者。究竟解脫。不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>觀者。究竟沈淪。」とある。狂言綺語の文芸觀も、つまりは煩惱と仏心と、複雑と單純・文芸と菩提・華麗な淨土教の美と、淡泊・素朴・嚴格な禪宗との中道を大觀し<sub>レ</sub>止観の妙用であった。その一証が無住の「沙石集」に、「弟子の兒に、朝夕心を澄して和歌をのみ詠む者があつたので、僧都は「兒共は學問などすることさるべき事なれ。この兒歌をのみ好みて所詮なきもの也。あれ體の者あれば余の兒共見學ぶ。明日里へやるべし」と、同宿によくよく申し含められたことも知らず、月冴え物靜かなるに、夜打ち更更けて縁に立ち出でて手水使用とて彼の兒詠じていう。「手に結ぶ水に宿れる月影のあるかなきかの世にもむむかな。」僧都これを聞いて、折節といひ歌の體といひ、心肝に染みてあはれであつたので、歌は道心のしるべにも成るべきものなりけりと、此の兒を留め、己もその後は歌を詠んだとある。源信を指導者としその世界觀に據つて構想した源氏物語には、營卷には全卷の動脈としての仏教的文芸哲学が書かれ、やがてこれが源氏物語を最高古典とする原據となっているのである。この物語の明石入道・宇治十帖の人物・保胤や空也には・天台淨土教の育んだわび・さびが発芽している。これを繁茂させ貴族的な文弱を衰微させていったのは、中世全体に亘る末法的歴史社会であつた。

方丈記はのわび・さびは、保胤の「池亭記」を通じて楽天の「池上篇并序」に影響をうけている。

源信の禪淨双修という天台淨土教の宗義の真実は、外相や名目は変ったが、法然・親鸞一遍を一貫していると思う。中世前期文芸の崇高は禪の所産である。中世前期和歌については、「禪の本質と人間の真理西谷啓祐」一篇・北山正迪・禪と中世初期歌論」がある。私も「中世文芸の仏教的史観」なる小著に、俊成・定家の歌論について書いておいた。尚新古今和歌抄・沙石集等の説話文芸等研究すべきことが多い。

新古今集の中軸にある幽玄は、不可思議なる生命である。一切衆生・事々物々盡く不可思議なる生命を蔵している。大美・妙・妙有・靈妙・四次元・大宇宙生命である。これを老荘や禪が直観した。

仏教では如来蔵・阿頼耶・蔵識・倉庫としての意識(alaya vijnana)種子識・創造者する魂(Pudgola)を名づけている。象徴・美しき魂・和魂である。唐の詩人賈賓王の「螢火賦」に「委性命今幽玄」、晋の謝道韞の「登山」の詩に、「巖中間虛宇 寂寞幽以玄」。臨濟禪師に「仏法幽玄」とある。日本でも伝教の「一心金剛戒體決」に「得諸法幽玄之妙」。弘法の「般若心経秘鍵」に、「釈家虽多末、此幽、独空畢竟理、義用最幽玄」。源信の「観心略要集」に、「法門幽玄、非、レ諭、不、レ知」とある。この源信の意見は、法門の幽玄さは、比喻・方便つまり形象化せねば凡夫には了解できないというので、ここに彼の天台淨土教が美的仏教といはれる所以がある。

尚幽玄の語は、藤原宗忠の「作文大體」や菅三品の詩に見られ

日本文藝學原論 「日本の靈性美」

る。これが新古今集に始まり中世の美意識の中軸となったのは、蒙古襲来・南北朝紛争という未曾有の内憂外患に逢い、挙国深い潜在的  
可能力・日本の靈性に覚めたのである。夢の告や神風を信じ、無からのみが現れることを信じる程、形而上の神秘主義に魅せられていた處に、幽玄の美が顕現したのである。記紀の和魂が奇魂・幸魂・荒魂・和魂とそれぞれ個性ある活動をする如く、無量の種子を蔵する如来蔵は、多様な美しき魂となって雄飛する。定家はこれに有心体・面白体・鬼拉体・幽玄体等の十体に、名づけた。禪淨兼修の美である。この十体を包摂するのが、新古今集の幽玄である。長明の「無明抄」に、

新古今集の止観的であることを、

今ノ世ノ歌ヲバズロ事ノ様ニ思テ、ヤ、達磨宗ナドトイフ異名ヲ付テソシリアザケル

と書いている。定家は「毎月抄」に、

この十体の中にいづれも有心体にすぎて歌の本意と存ずる姿は侍らず。……さればよろしき歌と申候は、歌ごとに心の深きのみぞ申ためる。……騰氣とんきとして心底みだりがはしき折は、いかにもよまむと案ずれども、有心体は出来ず。

といっている。美的概念としての有心体を、様式概念としての幽玄体より上位においている。有心とは止観から湧出する慈悲心・楽天の兼濟である。感性と理性の調和である。

和歌は日本人の美の最勝の象徴である。だから幽玄又は有心は、和歌に多く妙用されている。而して幽玄、有心のある處に禪や老荘がある。漢和辞典によれば、幽には、かすか、かくれる・ひそむ・

かくす・くらいい・おくぶかい・ふかくとおい・ほのか・とじこめる  
・しづかなさま・他界の義。玄には、くる・奥深い道理・微妙・静  
・清く静か、の義がある。幽玄については、多くの研究がなされて  
きたが、私が学ぶこと多かったのは、岡崎義恵先生の文学的研究  
と、大西礼氏の美学的研究「幽玄とあはれ」であった。私も「日  
本文学の仏教的論究」（昭和二十七年）。「中世文芸と仏教」（昭和  
三十一年）。「日本古典の仏教精神」（昭和三十三年）。日本古典  
文芸美の伝統」（昭和三十六年）。「中世古典の仏教精神」（昭和  
四十九年）と、研究しつづけた。大西氏の「幽玄とあはれ」には、  
幽玄の概念を、隠蔽・朦朧・静寂・深遠（難解な思想を蔵する）・  
充実相・神秘性（宇宙感情）・非合理（不可説・微妙を列挙してい  
る。そして幽玄概念の最も中心的な意味は、美的意味の深さにあ  
る。この深さは、心の深さ・有心・心のまこと、心の艶等精神の価  
値内容と照応していると考えられる。定家は「毎月抄」に、有心体  
は惚ての歌に亘るべく、最勝の歌体であり、やさしくものあはれに  
心深く、歌の中道であろうといっている。私はこれを要約して大慈  
悲心であるといった慈悲にはつねに智慧が離れていない。（源氏物  
語世界の浄土教）。これは既に源氏物語において醸造中であったの  
である。これをまとめてゐるのが巻巻の物語論である。私はこのこ  
とを「源氏物語の探究・源氏物語の仏教美学」（昭和四十九年）に  
論究した。大西氏は「精神の創造性を極度に止揚せしめ、対象であ  
る絶対的生命に全幅の我を帰依せしめる純粹静観（止観）の境地に  
徹する時、自然と精神・対象と我が一体一如となって、存在それ自  
身の直接の全相を、その刹那の中に髣髴せしめると同時に、又個の

存在が全の存在に、ミクロコスモスが、マイクロコスモスに拡充さ  
れるとも言ひ得べき、美的体験の特殊相というのである」と論じて  
いる。ここに崇高も象徴も蔵しているのである。定家は元々価値的  
概念であった幽玄を、乱世を契機として、優美を加味した様式機  
会と変化し、その代りに「愚秘抄」の理性無民とか、楽天の兼濟とか  
陀羅尼とか慈悲心とかいふ充実した内蔵を持つ有心を創新したので  
ある。時代が降り乱世が深刻になるにつれ倫理性を主張する「愚秘  
抄」の如き假托書もでてきたのである。善と美は根本的に一如であ  
る。それが日本の歌道である。日本人と称する時、国土も人であ  
る。その日本人を美しくする道は歌道を最第一とすることが、日本  
の伝統美である。歌道は歌道と称する宗教である。学徒は歌作らんと志を立て、大学に至ってこれを達成せねばならぬ。大学を卒え  
て、詩歌に親しまざる者は、学未だ成らざる者である。

禅定の文芸を論ずる者は、中世の禅院・当庵の生活者を探究すべ  
きである。時代の求めに応じ幾多の偉大なる精神の英雄が起ち上っ  
た。それを生年の順に並べてみる。法然・栄西・信空・長明・無住  
・慈圓・隆寛・解脫・聖光・幸西・俊仍・聖覺・明慧・親鸞・証空  
・長西・懷奘・良忠・道元・聖一・法燈・立信・日蓮・大応・他阿  
・顯意・一遍・兼好・凝念、等である。日本人の精神力を顕現した  
人々である。ここには紙数の制限があるので、明恵上人を取上げて  
みよう。

明恵は高倉天皇の承安三年紀州有田郡に生れた。父は平重国。八  
才父母を失うている。華嚴に帰依し、京都高山寺の草庵に住してこ  
に示寂した。六十歳。常に參徒を戒めて曰。

我レ常ニ志アル人ニ対シテ、仏ニ成リテモ何カセン、道ヲ成シテモ何カセン。一切求メ心ヲ捨ハテ、徒ラ者ニ成リカヘリテ、兎モ角モ私ニアラガフコト無ク、飢来レバ食シ、寒来レバ被ルバカリニテ、一生果テ給ハバ大地ヲバ打ハズストモ道ヲ打ハズス事ハアルマデキト申スヲ、徒ラ者トイフハ先ヅ身心ヲ道ノ中ニ入レテ、怒マニ睡眠セズ、引クママニ任セテ雑念ヲモ起サズ、自由ナルニ随ツテ坐相ヲモ乱ラズ、終日終夜志カクノ如クシテ、能ヲモ嗜マズ、芸ヲモ求メズ、仏ニ成ラント思ハズ、道ヲ成セントモ思ハズ人中ノ昇進更ニ投ステ、一切求ムル心ナクシテ、一生ヲ果テントイフ、大願ヲ立テ給ヘトナリ。生涯カクノ如ク徒ラ者ニナリカヘラバ、豈ニ徒ラナルコトアラシヤ。(御詞抄)

これ正に禪の骨髄である。上人の信奉した華嚴思想は、道元の「正法眼藏」に伝はっている。弟子の喜海の「明恵上人伝記」に、「西行法師、常ニ来テ物語シテ云ク。……去バ一首誦出テハ一体ノ仏像ヲ造ル思ヲナシ、一句ヲ思統テハ秘密ノ真言ヲ唱ルニ同シ。我此歌ニヨリテ法ヲ得事アリ云々」喜海其座ノ末ニ在テ、聞及シママ注「之」とあるによれば、明恵の和歌の指導の一人は、西行である。彼の和歌については、「井蛙眼目」に、「明恵上人は此道教寄異レ他なり、仍テ新勅撰にも歌数多被撰入、又自ら遣心集といふ集を書きて、歌をあつめられたり。」とある。当時は定家及其の一門の和歌風が世を靡したなかに、卒直にして独特なる用語句法の妙は、道心の眼を以て見たものである。月や白色を歌うた歌が多い。清らかな悟境の表現である。

住房の西の谷にははあり、定心石と名づく、松あり繩床樹と名

日本文藝學原論 「日本の靈性美」

づく、もと二枚にして座するにたよりあり、正月の雪ふる日、少しひまあるほど坐禪するに、松の嵐はげしく吹きて、墨染の袖に霰の降りつもりて待けるをつゝみて、石の上をたつとて、衣裏明珠のたとひを思ひいでゝよみ侍りける。

松のした 岩根の苔に すみぞめの 袖のあられや かけし白玉

(新勅撰十、釈教)

高尾ノ草庵ニコモリキルニ、後夜ノオコナヒシハムベラムトテ手ウツゾケノモトニイタルニ、イトスクナクナレルミヅニ、月ノウツリタルヨミレバ、イヤシケレドモ、二、三密ノマドニイリテオコナヒノカズモトシツモレバ、由具福智故、自心如満月ノ観念モコ、ロニソムニ、秋ノ月クマナクスミテ、ミヅニウツルヨミテきよたきの ふかくすみなん 水のいろは 人けがすらん そこは にごらじ

おほそらは すみあらしたる やどなれや まつのこずへに お

つる月かげ 高山寺藏

アカアカヤ アカアカアカヤ アカアカヤ アカアカアカヤ ア

カアカヤ月

マメノコノ 中ナルモチキト ミユルカナ 白雲カ、ル 山ノ端

ノ月 遣心和歌集

注

① 水野平次 平安時代文学と白氏文集 九七頁

② 下関文化大学紀要第十号 村田昇 狂言綺語の文芸観

③ 村上専精 日本仏教史綱

④ 井上光貞 日本浄土教生之史研究 九九頁

⑤ 村上素道 高山寺明恵上人